

# 正木町遺跡第20次発掘調査報告書



2007

名古屋市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、名古屋市中区正木一丁目16-25で実施した正木町遺跡第20次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、会社事務所建設工事に伴って実施し、対象面積は90m<sup>2</sup>期間は平成19年1月9日から同年1月31日である。ただし、建物基礎の関係で掘削深度の制限があり完掘していない部分がある。
- 3 発掘調査に関わる調整事務は、市教育委員会文化財保護室伊藤正人が担当し、発掘調査を実施した名古屋市見晴台考古資料館の担当者は、学芸員田原和美、水野裕之である。本書は、同館学芸員村木誠、服部哲也の協力を得て水野が執筆した。
- 4 本書で用いる水準値は、東京湾平均海面(T.P)、平面図の座標は、国土座標第Ⅶ系（世界測地系）によっている。
- 5 調査の記録、出土遺物等は見晴台考古資料館で保管している。
- 6 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々にご教示、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

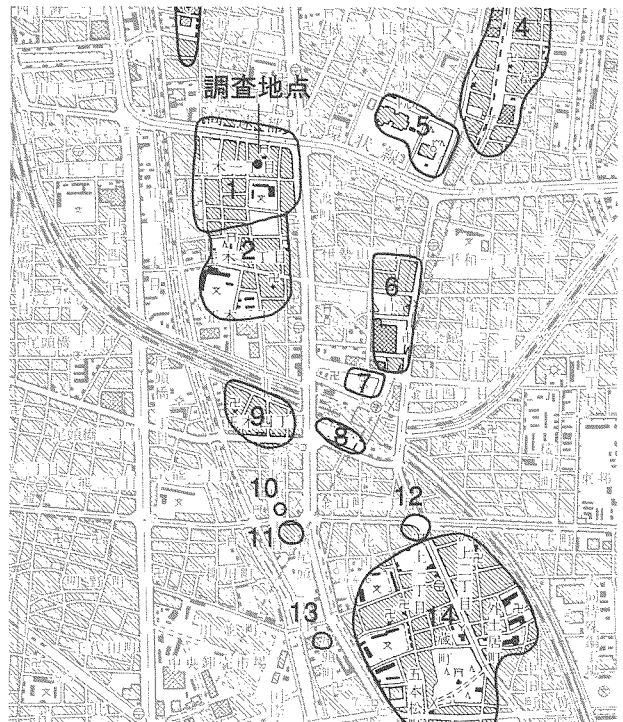
城ヶ谷和広 ニッカ株式会社 大和ハウス工業株式会社名古屋支社

## 目 次

I 位置と環境	2
II 調査の経過	2
III 調査の成果	
1 基本土層	3
2 遺構と遺物	5
IV まとめ	10

## 表紙写真

〔 調査区全景（西から）  
上段（1・2、3区） 下段（4区） 〕



- 1 正木町遺跡
- 2 伊勢山中学校遺跡
- 3 松原町遺跡
- 4 富士見町遺跡
- 5 古渡城跡
- 6 古沢町遺跡
- 7 金山北遺跡
- 8 東古渡町遺跡
- 9 尾張元興寺跡
- 10 住吉神社東遺跡
- 11 沢観音堂貝塚
- 12 熱田村城
- 13 瓶屋橋遺跡
- 14 高蔵遺跡

図1 正木町遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

## I 位置と環境

正木町遺跡は、現在の都心部の南側にあたり、古墳時代から古代にかけての遺跡群が濃密に広がる一帯の北部に位置する。付近の標高は8～9mであり、熱田台地（熱田層）を基盤としている。

当遺跡周辺では、これまでの調査から5世紀に鉄鋌や韓式系土器、初期須恵器を有する集落があり（伊勢山中学校遺跡第5次、正木町遺跡第4次）、7世紀後半には、沖積地（当時は海の入江が近かったと思われる）を望む台地西縁に尾張最古の寺院があった（尾張元興寺跡）。また、当遺跡第5次調査で6棟検出された古墳時代ないし奈良時代とされる総柱の大型掘立柱建物址は、愛智郡の役所に関するものと考えられるほか、第13次調査出土の羊の頭部を模した羊形硯片等、古代の須恵器の出土量も多い。

## II 調査の経過

当地点は、試掘調査で遺構埋土等が確認され、事業者の協力を得て発掘調査を実施した。既存のコンクリート基礎は遺構の損失を防ぐため除去していなかったため、梁の単位ごとに、東から1～4区の順で調査を行なった。なお、調査地点内での排土置き場が無いことから、1・2区を先行して調査した後埋め戻して、3区、4区の調査をそれぞれ行った。

コンクリート基礎の底面は、ほぼ熱田層の上面にあたることと、梁の内側の堆積土も、ほぼ同じレベルまで表土・攪乱土が多く、本来の遺物包含層は、ほとんど残存していなかった。このため、大部分は、遺構埋土部分の調査となった。4区では、特に近代以降の攪乱土坑が多くあった。

なお、GL-約100cmより下層の遺構埋土は掘削しない条件での調査であったため、完掘していない遺構がいくつかある。

出土品の量は、須恵器、土師器、近世陶磁器など、調査時点でコンテナケース3箱分であった。

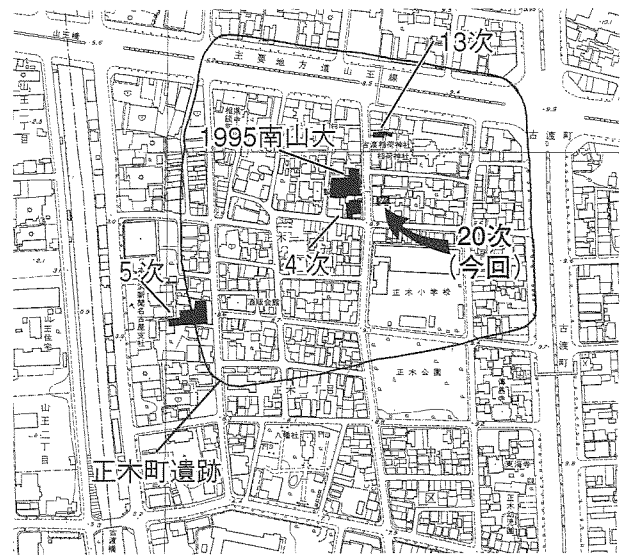


図2 調査位置と周辺の主な調査地点（1：6,000）

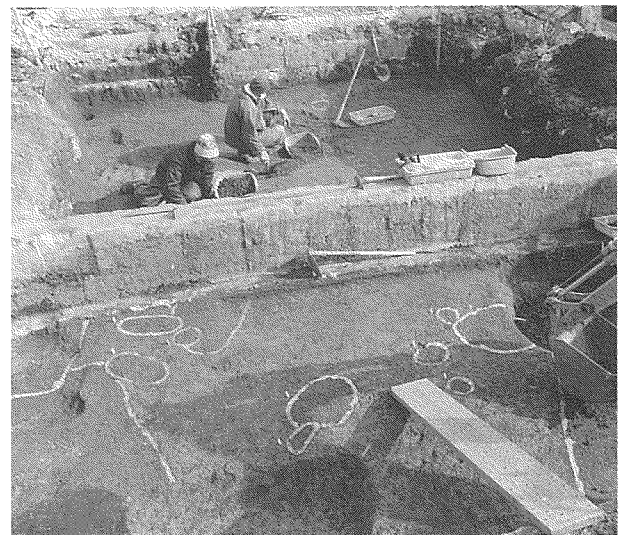


写真1 1・2、3区調査状況



写真2 4区遺構検出状況

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 基本土層

正木町遺跡では、遺跡範囲の南西部分での発掘調査成果から中世（～近世初頭？）頃に地盤の熱田層の上位層（黄橙色粘質土）を数十センチ以上掘り下げて削平し、「整地」が行われたと思われる状況の土層堆積が確認されている。削平された面の熱田層は、比較的硬い砂層の面まで削ることを意識しているようであるが、この上に堆積する土層（ブロック状などの「整地土」）には、須恵器や陶器類など、古墳時代～中世（～近世初頭）までの遺物が含まれている。

今回の調査地点は、本来の熱田層上面が残っている場所であった。その上に堆積する土層は、以前の建物工事等による攪乱土層であり、包含層は、残存していなかった。このため、調査区の土層断面図（A-B）に代表されるように、遺構埋土のみが検出された。

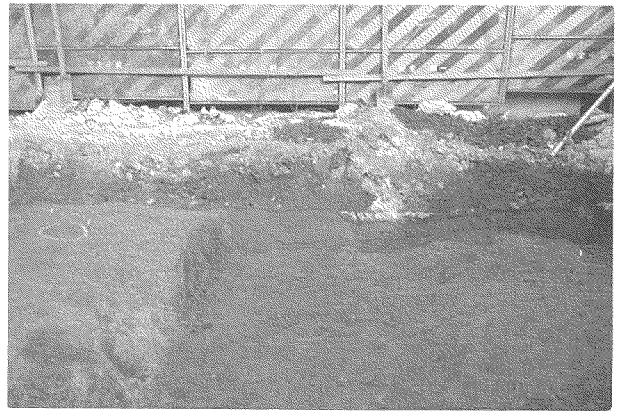


写真3 1・2区北壁土層断面



写真4 4区SD01A、SD01B埋土断面

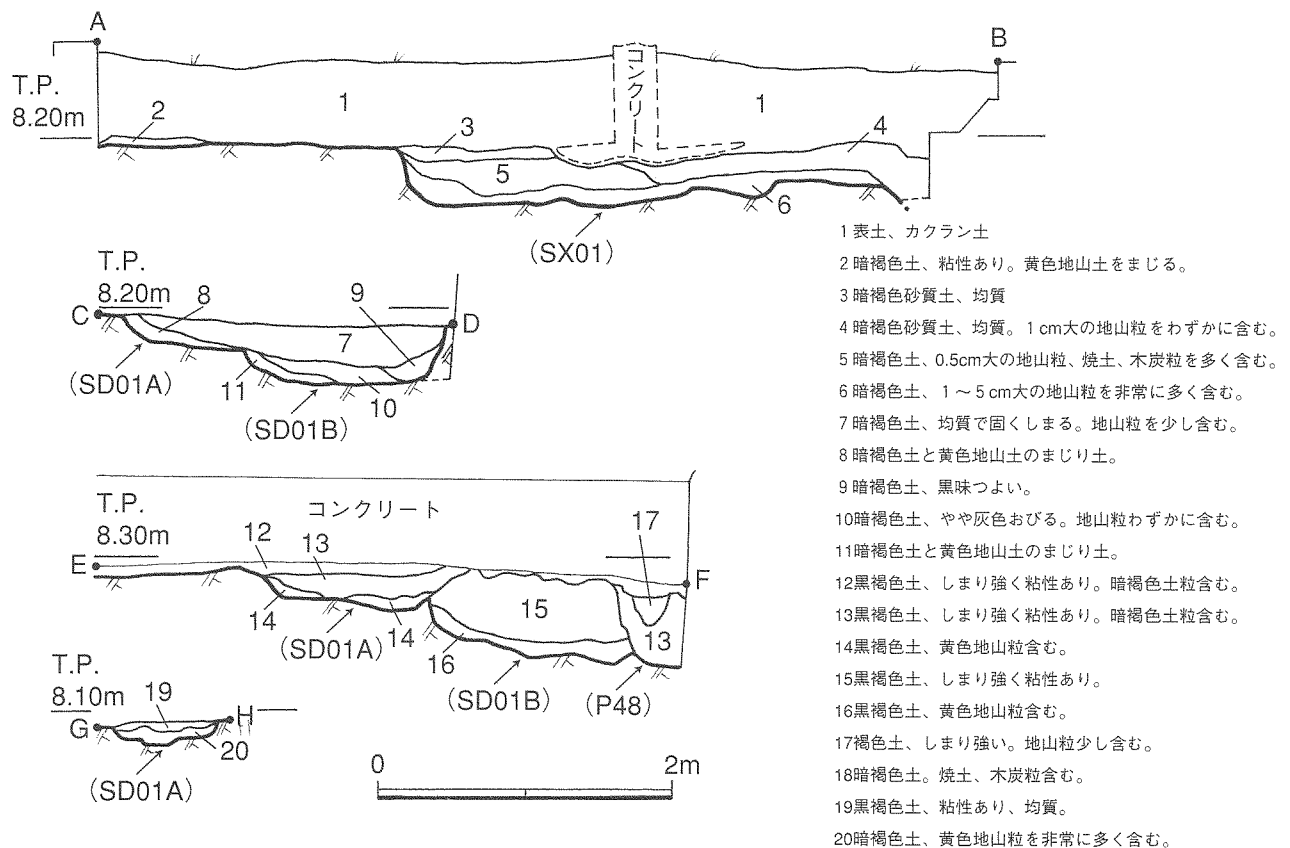


図3 土層断面図 (1:50)

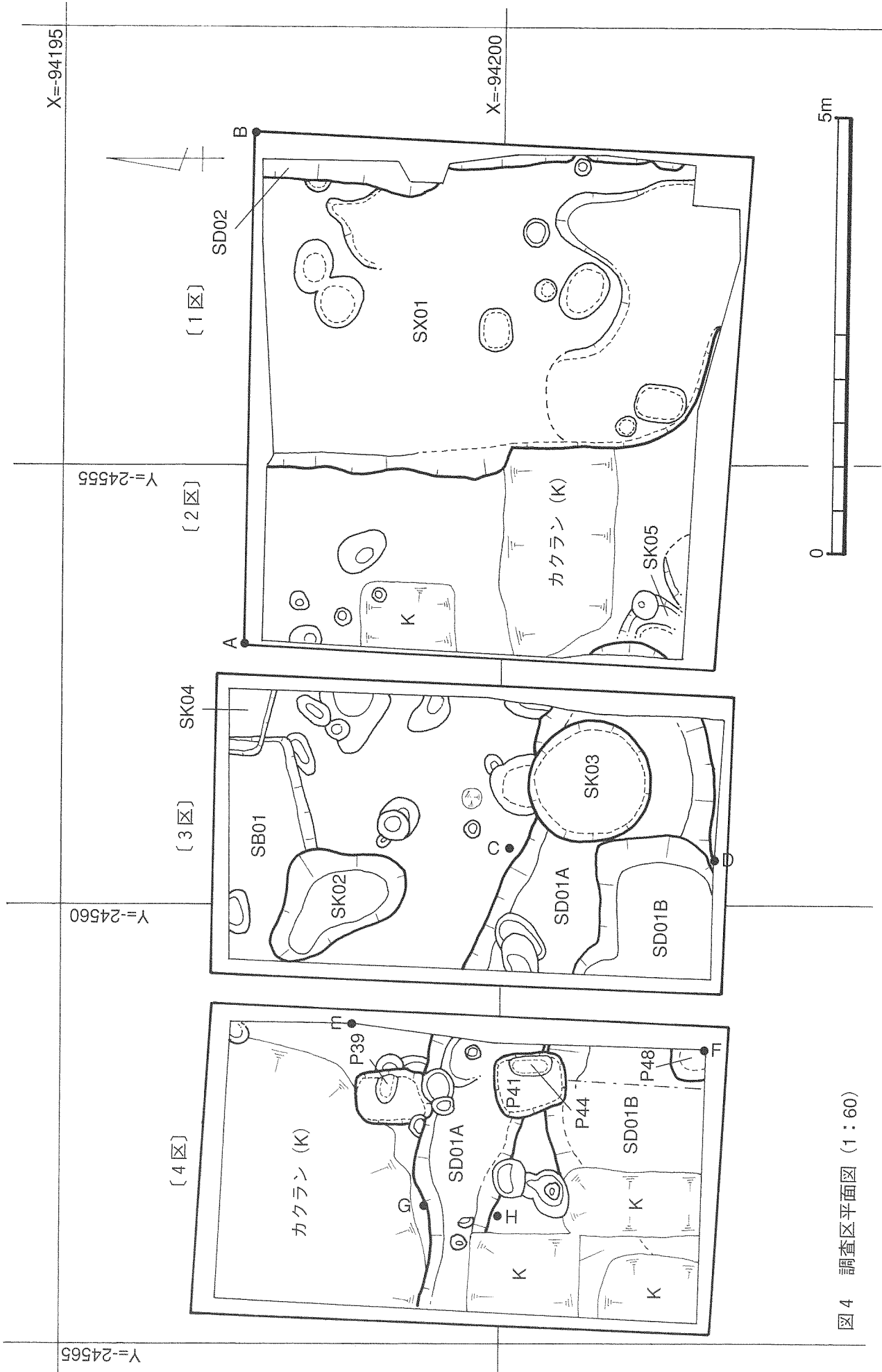


図4 調査区平面図 (1:60)

## 2 遺構と遺物

遺構は、熱田層（地山）面で検出したものがほとんどである。古墳時代の遺物を混入した奈良時代頃の大型遺構と近世の土坑、井戸を検出した。

### (1) 古墳時代・古代

#### ●SX01

地山を40cmほど下げて比較的急角度に壁をつくる竪穴住居状の遺構である。底面は、平坦に近いが、若干の凹凸がある（一部未完掘）。埋土には、地山、焼土、木炭ブロックを含み、7C～9C初頭頃の遺物が出土。底面でピットを検出しているが、掘削制限で完掘していないものが多い。

#### ●3区SD01・SD03（SD01Aとする。）

3、4区の幅1～2mのやや蛇行する比較的浅い溝状遺構である。4区で一部重複する2条の溝状遺構（SD01AとB）であったことが確認された。古墳時代の遺物を少し含むが、奈良時代（7C後半～8C前半頃）の須恵器坏類などが出土した。

#### ●3区SD01深部・4区SD01（SD01Bとする。）

当遺構は、SD01Aに先行する遺構であるが、出土遺物の時期はほぼ同じである。遺構の幅は、南側が未検出で不明であるが、深さに対しやや幅広の溝状遺構と思われる。器台や赤色塗彩の土師器皿、碗など特殊な遺物が出土した。

#### ●SB01

竪穴住居状の遺構の一部を検出した。地山面からの掘り込みは10cmほどで、遺物はP（ピット）25とともに古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器の小片がわずかに出土した。

#### ●SK04

浅い方形状をなすと思われる遺構の一部である。古墳時代の土師器高坏片などが少量出土した。

#### ●SK05

SD01Aに先行する遺構の一部である。遺物は、古墳時代の土師器、須恵器の細片が出土。



写真5 SX01（1区）



写真6 SD01AとSD01B（3区）



写真7 SD01AとSD01B（4区）



写真8 SB01（3区）

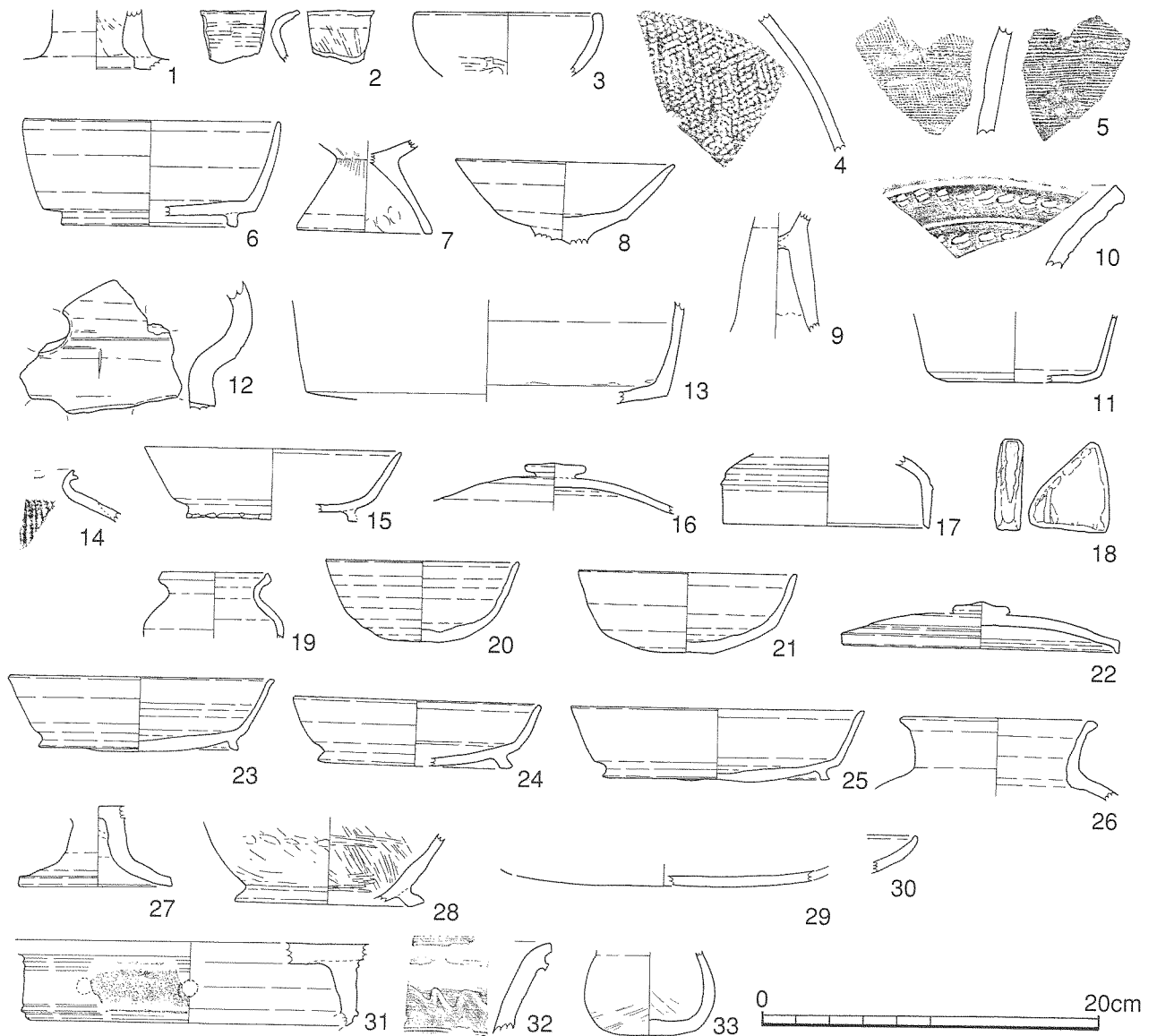


図5 古墳時代～古代の出土遺物〔1～3(SX01)、4～9(1・2区表土、包含層検出)、10～18(SD01A)、19～31(SD01B)、32(4区表土)、33(P5)〕

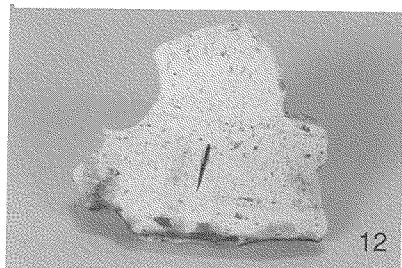


写真9 須恵器・器台

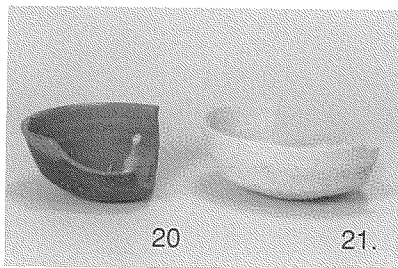


写真10 須恵器・坏

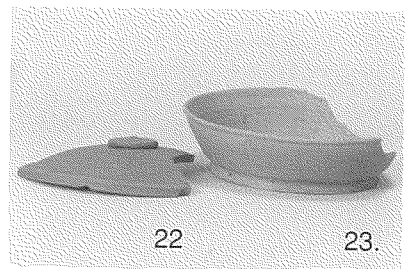


写真11 須恵器・坏蓋、坏



写真12 土師器・碗

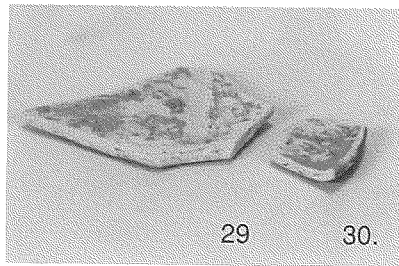


写真13 土師器・皿

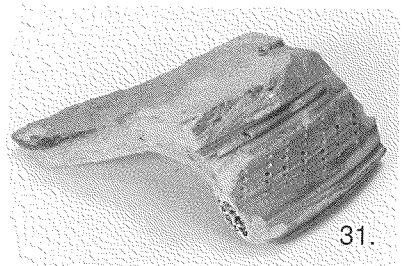


写真14 須恵器・器台

●SD02

1区の東壁でわずかな部分を検出した。形状等は不明である。埋土は他の遺構との差異が明瞭で、平安時代の灰釉陶器碗?片が1点出土した。

●ピット

P39、P41 (P44)、P48の3基がほぼ1列に並ぶ。これらのピットは、掘形が80×60cmほどの隅丸方形で、深さは、検出面から40cm以上(以下未掘)である。柱痕も明瞭で、柱痕間は、1.5～1.8mまでの間である。これらのピットは、掘立柱建物址の一部と考えられるが、他に対応する柱穴は不明であった。時期は、SD01A埋土をP41が切っているが、出土遺物は古墳時代～奈良時代の土師器、須恵器の細片である。

他にピットは、40基あまり検出された。分布は、調査区全体にわたる。古代の土器の細片がわずかに出土するものがほとんどであった。

(1) 近世

●SK02

3区の地山面で検出された長径1.7m～短径1mほどの不整楕円形を呈する土坑で、底までの深さは、30cmあまりである。埋土は、均質でやや砂質の灰褐色土であった。出土遺物は、14C～15Cの中世陶器片をわずかに含み、17C末～18C前葉頃の陶磁器細片が10点足らずである。肥前系陶器碗・皿片、染付磁器小杯片、瀬戸美濃陶器碗片があった。

●SK03

SK02の南東部で検出した径約1.4mの井戸跡と思われる遺構である。深さは検出面から約30cmまで下げ、掘削制限となったため完掘していないが、さらに1mは底に達していない。

埋土は、やや砂質で均質な暗褐色土で、貝殻片を少し含む。出土遺物は、18C前葉～後半頃の陶磁器類や土師器皿が検出され、各種の日常食器類は、比較的上質の製品が多い。

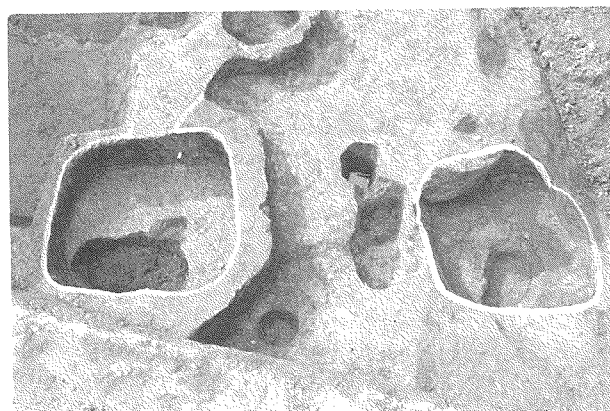


写真15 4区P39とP41 (P44)



写真16 4区P48埋土断面

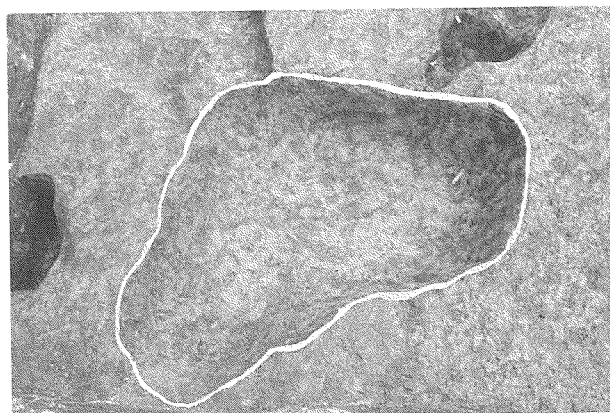


写真17 SK02

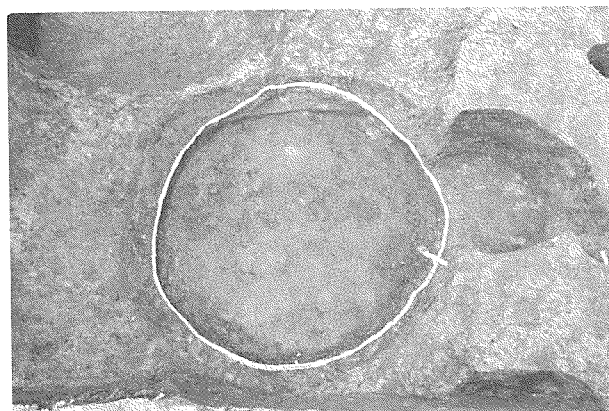


写真18 SK03



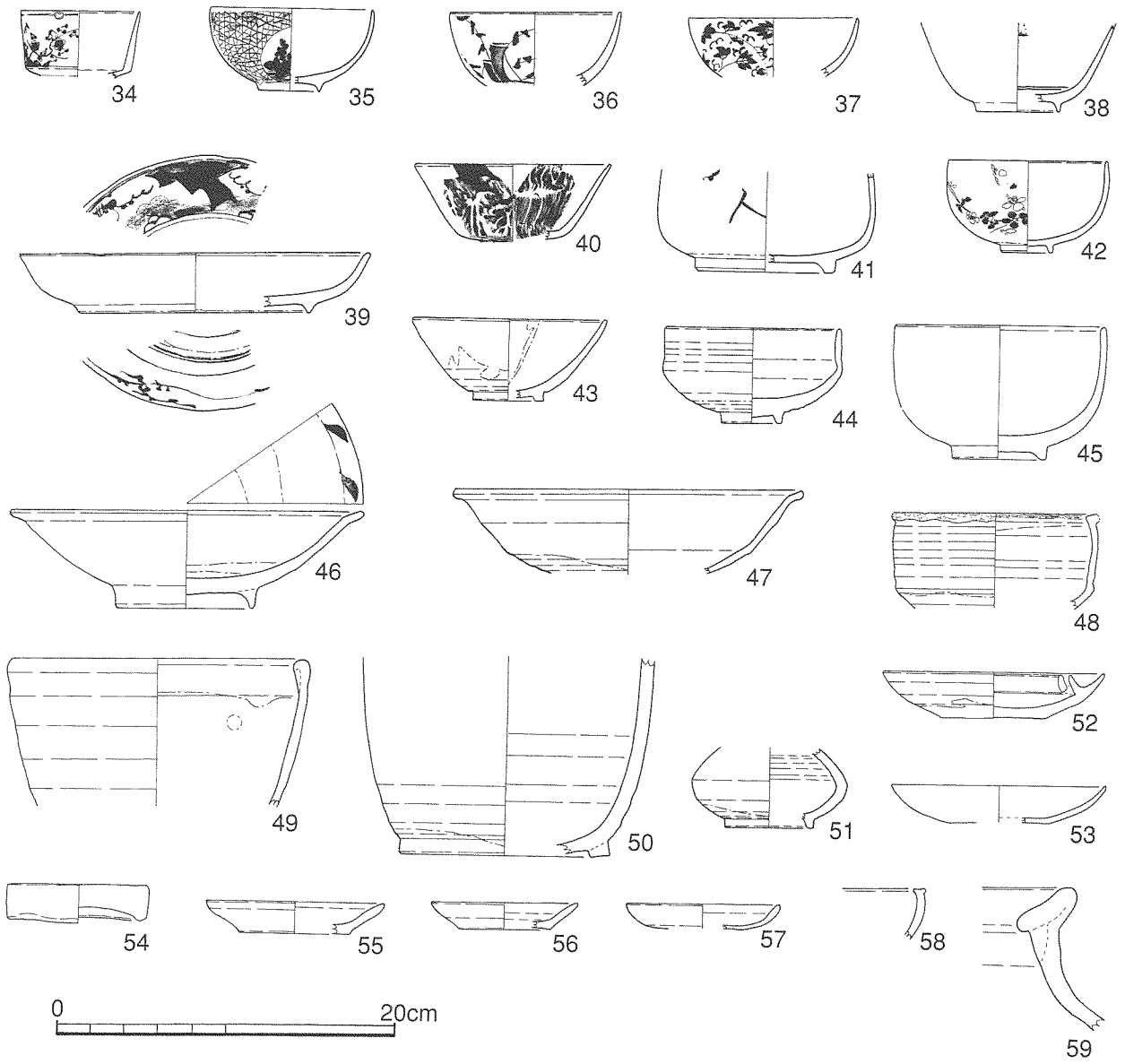


図6 SK03の主な出土遺物（近世）

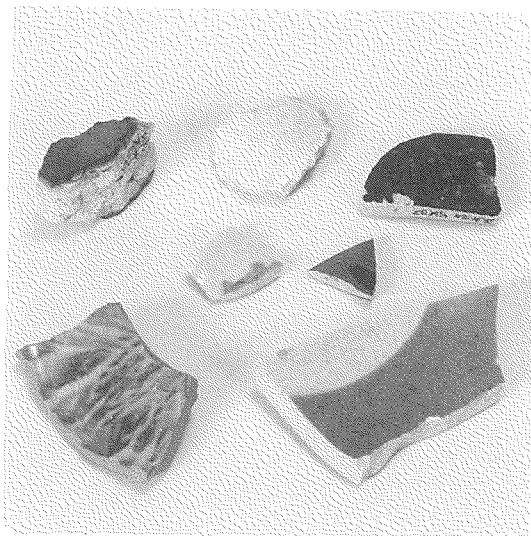


写真19 SK02出土遺物



写真20 SK03の主な出土遺物（近世）

表1 遺物観察表（本書掲載遺物の番号と共通）

図番	器種名	出土位置	遺存部	備考
1	須恵器・長頸瓶	SX01最下部	頭部下位	胎土は灰白色、自然釉。8～9世紀。
2	土師器・甕	SX01最下部	口部小片	二次被熱か、赤褐色を呈する。7～8世紀。
3	須恵器・高坏か	SX01最下部	口部小片	胎土は明灰色。手持ちヘラ削り痕。初期須恵器。
4	須恵器・甕	1・2区検出	胴部片	格子叩き痕。初期須恵器。
5	埴輪	1区検出	胴部片	須恵質であるが、橙色を呈する。
6	須恵器・坏	1区検出	約3分の1	焼成良好で緻密。高台内側は回転ヘラ削り。
7	土師器・台付甕	2区検出	台部の約3分の1	器表面の保存状態はやや不良。5世紀。
8	土師器・高坏	2区検出	坏部の約5分の4	胎土に微細な雲母片を多く含む。5世紀初頭か。
9	土師器・高坏	2区検出	脚部片	8の土器とは異なる胎土。5世紀。
10	須恵器・甕	SD01A(3区SD01ベルト東)	口部片	太い櫛刃状工具の刺突文。
11	須恵器・坏	SD01A(3区SD01Aベルト東)	図示部分の3分の1	7世紀後半～8世紀前半頃
12	須恵器・器台	SD01A(3区SD01ベルト東)	胴部小片	生焼けて土器質。砂粒を多く含む、黄灰白色を呈する。小牧市篠岡78号窯出土品に近い形態の須恵器器台がある。7世紀後半～8世紀初頭。
13	須恵器・壺か	SD01A(3区SD01ベルト1・2層)	底部小片	外面は回転ヘラ削り。奈良時代。
14	須恵器・壺か	SD01A(3区SD01ベルト西)	口部小片	擬格子叩き痕。初期須恵器。
15	須恵器・坏	SD01A(3区SD01ベルト西)	図示部分の約8分の1	胎土は明灰色。焼成良好。
16	須恵器・坏蓋	SD01A(3区SD01ベルト西)	図示部分の約5分の1	胎土は灰白色。焼成良好。
17	須恵器・坏蓋	SD01A(3区SD01ベルト1・2層)	図示部分の約4分の1	焼成やや不良。5世紀。
18	砥石	SD01A(3区SD01ベルト西上半層)	破片?	やや軟質の砂岩製。側面の使用痕が特に平滑。
19	須恵器・小型壺	SD01B(3区SD01ベルト3～5層)	図示の約5分の1	胎土は暗灰色。奈良時代。
20	須恵器・坏	SD01B(3区SD01ベルト3～5層)	約3分の2	赤褐色を呈す。7世紀後半～8世紀初頭頃。
21	須恵器・坏	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	約3分の2	焼成やや不良。黄灰白色を呈する。7世紀後半～8世紀初頭頃。
22	須恵器・坏蓋	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	約3分の1	7世紀後半～8世紀前半頃。
23	須恵器・坏	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	約5分の4	7世紀後半～8世紀前半頃。
24	須恵器・坏	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	約3分の1	焼成良好。7世紀～8世紀前半頃。
25	須恵器・坏	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	約2分の1	焼成良好。底部外面中央部に回転糸切痕がわずかに残る。8世紀前半。
26	須恵器・壺	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	図示の約3分の1	焼成良好。7世紀後半～8世紀前半頃。
27	須恵器・高坏	SD01B(3区SD01ベルト西下半層)	脚部の約2分の1	焼成良好。明灰色。初期須恵器。
28	土師器・碗か	SD01B(3区SD01深部)	図示部分	内外面、高台底まで赤色塗彩、ヘラ磨き。胎土は微細な砂粒を多く含む黄褐色でやや粗い。奈良時代。他地域からの搬入品と思われる。
29	土師器・皿	SD01B(3区SD01深部)	図示部分の約4分の1	胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密。内外面に赤色塗彩、ヘラミガキ。
30	土師器・皿	SD01B(3区SD01深部)	口部小片	胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密。内外面に赤色塗彩、ヘラミガキ。
31	須恵器・器台	SD01B(4区SD01)	図示部分の約10分の1	板状の台部にくびれのある脚部が付く形態か。台部上面の一部が煤状に変色。脚部上部に円孔と櫛歯の刺突文。
32	須恵器・甕	4区検出	口部小片	焼成良好。灰白色。初期須恵器。
33	土師器・小型壺	2区P5	図示部分の約3分の1	外面底部ヘラ削り。5世紀。
34	磁器・蓋物	SK03	図示部分の約4分の1	肥前系染付磁器。18世紀。
35	磁器・碗	SK03	図示部分の約3分の1	肥前系染付磁器。18世紀。
36	磁器・碗	SK03	図示部分の約3分の1	肥前系染付磁器。18世紀。
37	磁器・碗	SK03	図示部分の約6分の1	肥前系染付磁器。18世紀。
38	磁器・碗	SK03	図示部分の約8分の1	肥前系青磁染付磁器。18世紀。
39	磁器・皿	SK03	図示部分の約6分の1	肥前系染付磁器皿。輪花。18世紀。
40	陶器・碗	SK03	図示部分の約8分の1	唐津系刷毛目碗。17世紀末～18世紀中頃。
41	陶器・壺?	SK03	図示部分の約3分の1	肥前系(京焼風)陶器。鉄絵部分に刷毛目。内面無釉。
42	陶器・碗	SK03	約2分の1	信楽?。上絵付碗。
43	陶器・碗	SK03	図示部分の約8分の1	美濃。掛け分け碗。18世紀半。
44	陶器・碗	SK03	約3分の2	瀬戸美濃。灰釉腰折碗。18世紀半。
45	陶器・碗	SK03	約3分の2	瀬戸美濃。灰釉。18世紀
46	陶器・皿	SK03	約3分の2	美濃。灰釉。口部内面に具須の列点文。18世紀半。
47	陶器・皿	SK03	図示部分の約6分の1	美濃。灰釉(御深井釉系)。18世紀。
48	陶器・香炉	SK03	図示部分の約5分の1	瀬戸美濃。鉄釉。灰落しに転用か。18世紀。
49	陶器・鉢(片口?)	SK03	図示部分の約6分の1	瀬戸美濃。黄釉。18世紀。
50	陶器・甕	SK03	図示部分の約3分の1	瀬戸美濃。鉄釉。
51	陶器・油壺?	SK03	図示の約5分の1	瀬戸美濃。灰釉(御深井釉系)。17世紀末～18世紀前半。
52	陶器・灯明皿受皿	SK03	約2分の1	瀬戸美濃。錆釉。18世紀後半。
53	陶器・皿	SK03	図示の約6分の1	瀬戸美濃?。錆釉。
54	土師器・焼塩壺蓋	SK03	ほぼ完形	18世紀半。
55	土師器・皿	SK03	図示の約5分の1	ろくろ成形。回転糸切底。胎土は緻密で灰橙色。
56	土師器・皿	SK03	図示の約4分の1	ろくろ成形。回転糸切底。胎土は緻密で灰橙色。
57	土師器・皿	SK03	SK03	非ろくろ成形。薄手。胎土は緻密で灰橙色。
58	土師器・内耳鍋	SK03	小片	
59	陶器・甕	SK03	小片	常滑。焼成非常に良好。赤褐色を呈す。18世紀。

#### Ⅳまとめ

今回の調査地点では、主に古代と近世の遺構が検出された。本来、付近には古墳時代以前の包含層や遺構が存在したと思われ、5世紀前後の遺物が古代の遺構埋土に比較的多く混入している。

古代の遺構では、SX01が地山（熱田層）を一段（約40cm）掘り下げて比較的硬い砂質の面をつくった遺構で、底面ではピットも検出されたが、建物等については不明である。SX01全体の形状や規模も、不明である。

同様な遺構は、当遺跡5次調査区（図2参照）のSD2がある。これは、幅9.5～12m以上の弧状を描き、やや急角度に数10cm下げて、比較的平坦な底面をつくる。埋土からは、8～9世紀の須恵器等が出土している。この底面では、総柱で大型の掘立柱建物址が5棟検出され、硬い砂の地山面まで下げてから建物群を造営した可能性がある。また、当調査区すぐ西側の1995年南山大調査地点でも、熱田層上位が削られた面で、奈良時代末に廃絶された井戸遺構（SE2）が検出されている。

また、今回調査区のSD01A、SD01Bは、7～8世紀代の須恵器が出土したやや不整形な溝状遺構である。出土した器台や赤色塗彩土師器の皿や碗は、市内では類例が少なく、当遺跡が役所的な関連を示す資料のひとつといえようか。

当遺跡のある近世の正木町付近は、「町続」の村である古渡村にあたる。町奉行が支配する名古屋城下に準ずる地域となったのは、享保13（1728）年のことである。尾張藩主7代宗春（1696～1764年）は、遊廓を公許し、享保16（1731）年から翌年にかけて、「西小路」「富士見原」「葛町」の三廓と呼ばれた遊廓（いずれも現中区）が営業を開始した。当遺跡にあたる本町通の西には町屋や寺院があり、19世紀には武家の下屋敷も散在していた地域であった。「葛町遊廓」は、今回の調査区のすぐ北にあると推定され、山王稲荷と大泉寺に接して置かれていた（図7参照）。

今回、調査地点の江戸時代の遺構は、わずかに2基であり、遊廓に関係した遺構とは断定はできないが、SK02（土坑）、SK03（井戸か）とも出土遺物の時期は遊廓のあった時期とも一部重複し、比較的上質の製品も出土している。なお、この「葛町遊廓」は、享保21（1736）年に廃止（撤退）されたが、その後、三廓の遊女や茶屋女たちは、橘町、門前町、日置村（いずれも現中区）などに引越した料理茶屋の名目の店に、密かに遊女として置かれていたという。



図7 天保年間（1830～1844年）頃の様子〔(1998田原)より引用・加筆〕

《引用・参考文献》

- 伊藤秋男 1997 『正木町遺跡発掘調査報告書』 南山大学大学院考古学研究報告第7冊 南山大学大学院考古学研究室
- 新修名古屋市史編集委員会 1999 『新修 名古屋市史 第三巻』 名古屋市
- 田原和美 1998 「付編 近世以降の正木町遺跡付近の様相」『埋蔵文化財調査報告書29 正木町遺跡（第7次～第9次）』 名古屋市教育委員会
- 野口泰子 1996 『正木町遺跡—第5次調査の概要—』 名古屋市教育委員会
- 野澤則幸 2001 「正木町遺跡第13次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書38』 名古屋市教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	まさきちょういせきだいにじゅうじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	正木町遺跡第20次発掘調査							
編集者名	水野裕之							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL052-823-3200 FAX052-823-3223							
発行年月日	西暦2007年9月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	〃 〃 〃	〃 〃 〃			
まさきちょう 正木町 いせき 遺跡	なごやしなかく 名古屋市中区 まさきいちじょうめ 正木一丁目16-25	23100	7-19	35° 09' 01"	136° 53' 48"	2007.1.9 } 2007.1.31	90m <sup>2</sup>	会社事務所建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
正木町遺跡	集落跡	古墳時代、古代、近世		溝、土坑、柱穴		須恵器、土師器、陶磁器		第20次

### 正木町遺跡第20次発掘調査報告書

2007年9月28日

編集 名古屋市見晴台考古資料館  
 発行 名古屋市教育委員会  
 印刷 有限会社 ダイアローグ